

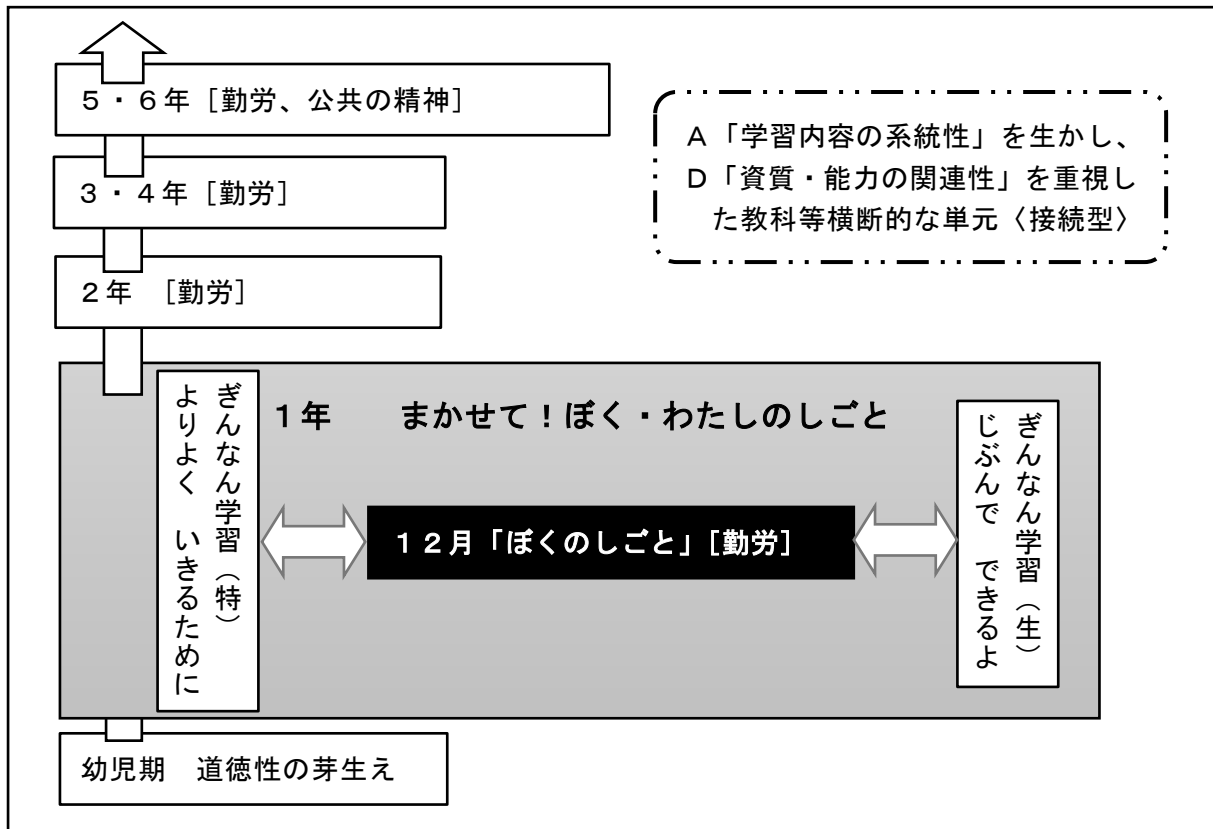
3 実践事例

第1学年

「まかせて！ぼく・わたしのしごと」

道徳科（+ぎんなん学習）

【単元全体構想について】



本単元は、道徳科における内容項目「勤労」を中心に構想した。「勤労」とは、自分の務めとして心身を労して働くことである。勤労は、人間生活を成立させる上で大変重要なものであり、一人一人がその尊さや意義を理解し、将来の生き方について考えを深め、社会生活の発展・向上に貢献することが求められている。将来の生き方について考えるとき、自分の務めとは何か、将来就きたい職業とは何かについて考えることになる。職業には、自分の幸福を追求するため収入を得て個人や家庭の生活を維持するという面と、社会の中で一定の役割を果たして社会を支えるという面があり、共に重要である。同時に、自分の能力や個性を生かして自らの内面にある目的を実現するために働くという職業を使命として捉える考え方もある。職業は、一人一人の人生において重要な位置を占めており、人は働くことで誰かの役に立ったり、充実感を味わったりして生きがいを感じ、社会とのつながりを実感することができる。働くことの意義や役割を理解し、それを現在の自分が学んでいることとのつながりで捉えることは、将来の社会的自立に向けて勤労観や職業観を育む上でも大切なことである。

本学級は、素直で明るく、進んで手伝いができる子どもが多い。自分のものではなくても落ちているごみを進んで拾ったり、トイレのスリッパを並べたり、協力してノートなどを配ったりと、みんなのために働くことを楽しいと感じている。どうしてそうするのか尋ねてみると、「ごみが無くなると、気持ちよく過ごせるから。」「次の人がスリッパをはきやすくなるから。」などと話してくれた。それを聞いた周りの子どもたちは、自然と拍手を送っていた。自分のした何気ないことがみんなから認められる、役に立つことができたと実感することで、みんなの役に立てるよう頑張りたいという思いが高まり、働くことのよさを理解することにつながるだ

ろう。そのような実態の子どもたちに、「自分が働かなくてもいいのに、どうしてそんなにがんばることができるのか」を尋ねることで、働くことについて今一度考え直し、みんなの役に立てることがうれしいといった、現段階での子どもたちなりの考えが持てるようにしたい。

道徳科において、本教材では、家庭での手伝いの場面を取り上げている。これまでに取り組んだことのない手伝いに最初は戸惑いを感じながらも、親子で一緒に風呂場の掃除をしていく中でコツをつかみ、自分だけでもできるようになって、家族から認められるという内容である。子どもたちの生活の基盤である家庭において、自らできることを行い認めてもらえることは、役に立ててよかった、もっとがんばろうという、働くことのよさを実感できる源となる。それを、家庭以外の生活にも広げ、みんなのためにできることを進んでしようとする気持ちを高めることのできる教材である。

そうした働くことについての学びを生かし、発揮できる場として、ぎんなん学習（生活科）「じぶんでできるよ」の学習へつなげていく。冬休みも生かし、家庭で自分にできることを見付け、継続してやってみる中で、働くことの大変さや、やり終えたときの充実感などを味わうことができるようにする。

さらに、その学びを生かし、発揮する場として、ぎんなん学習（特別活動）「よりよくいきるために」の学習へとつなげていく。学級のために、自分にできることは何かを考える活動を行う。これまでの生活を振り返り、自分の役割を見付け、実際にやってみることで、学級のみんなの役に立っていることを実感するとともに、自分が働くことで、よりよい学級になるように支えていることに気付くことができるようにしたい。

【単元（道徳科）のねらい】

働くことのよさを理解し、みんなのために進んで働こうとする態度を養う。

【単元の実際】（下線は指導の手立て）

「出会い」

- 自分は学級のためにどんな仕事をしているか振り返ることで、仕事に対する自分の持っている価値観を確認した後、教材を提示した。

T： 月組でどんな仕事してるかな。

C： ハッピーやたい係で、くじびきやおもちゃを作って、みんなに楽しんでもらっているよ。

C： 保健当番で、怪我した子や調子の悪い子を保健室に連れて行ったり、先生に知らせたりしているよ。

C： 勉強。（それ仕事なん？）そうよ。

T： 今日のお話は、そんなお仕事に関するお話です。

「追究」

- ポイントとなる言葉や挿絵を提示しながら、「その気持ち分かるな」「自分にも似た経験がある」といった思いを大切にして、自分のこととして考えられるようにした。

T： お母さんに「おふろばそうじ、一緒にやってみようか。」と言われたとき、ぼくはどう思ったかな。

C： 初めてだからドキドキした。

C： できるかな。けがしないかな。どうやってするのか。

T： 「やったあ。」と喜んだぼくは、どんなことを考えていたかな。

C： うれしかった。

T： 何がうれしかったのかな？

C： 掃除をすることがお仕事になったから、うれしかった。ほめてもらえたし。

C： お母さんがプロと認めてくれた。がんばった甲斐があった。

- 頼まれた仕事を率先して行うことで、働くことに対するやりがいに意識が向き始めていた。ここで、働くことに対して自分のこととして更に考えを広げ、多様な価値観に触れられるように、対立する考えを提示した。

T： (対立キャラクター登場) この仕事は、ひろきじゃないといけないのかな？ひろきだって、なわとびの練習や勉強などすることはたくさんあるよ。できる人に任せたらどうか？

C： 確かにだれでもいい。ひろきでなくてもいい。

T： ダークみきちゃんの話聞いてどう思った？

C： そんな考え、思いつかなかった。

C： けどもったいない。

C： 悪いと思った。(なんで?) ママが忙しくなる。仕事が増えちゃう。

- じっくり考えられるように、子どもと相談をして「どうしてやらなくてもいい仕事を頑張るのか」についての考えを付箋紙に書く活動を取り入れた (写真1)。その後、出てきた考えを整理しながら全体で話し合いを行った (資料1・写真2)。

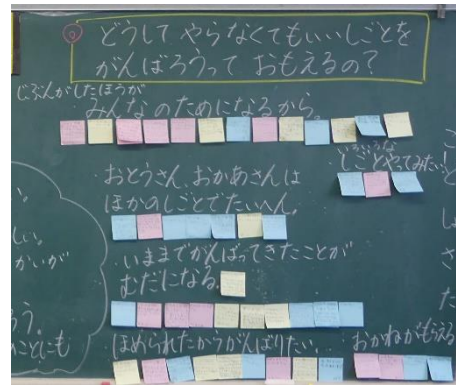


写真1、2 付箋紙に書き、話し合う様子

資料1 出てきた考え

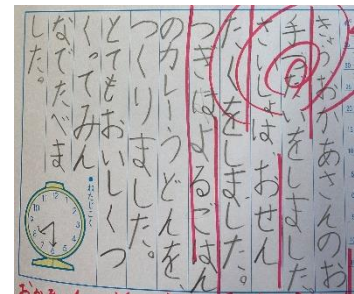
「振り返り」

- 学級での話し合いを振り返って、自分が納得できる考えをワークシート「ここにこ日記」に書く活動を取り入れ、自己を見詰める場を設けた。

- ・ ひろきは、前は遊びたい気持ちがあったかもしれないけれど、掃除をして、ほめられることもうれしいし、掃除をすること自体も楽しいのかなと思いました。
- ・ お父さんやお母さんが掃除をしてもらっても気持ちがいいけれど、自分が掃除をしたらもっと気持ちがいいのではないかと思います。
- ・ これまでがんばってきたことが無駄になってしまうから、自分が掃除をした方がいいと思いました。
- ・ お父さんやお母さんはいろいろな仕事があって忙しいから、自分ががんばって役に立ちたいのかなと思いました。
- ・ 働くことは、みんなのためになるから、楽しくできたらいいなと思いました。
- ・ わたしも、家とかで自分ができる仕事を探してみようと思いました。

- 最後に、これまで自分たちが行っていた手伝いをしている様子や日記の内容を紹介した(資料2、3)。

本時と同じように、「どうして手伝おうと思ったのか」を尋ね、何気なく行ってきたことがみんなの役に立っていることを再認識し、自分の中にみんなの役に立っている自分がいることを自覚して、今後の生活につなげていけるようにした。



資料2 紹介した写真

資料3 子どもの日記

【単元の成果と課題及び次年度の実施に向けて】

- 「勤労」という道徳的価値についてじっくりと考えられるように、人間理解（道徳的価値は大切であってもなかなか実現することができない人間の弱さなども理解すること）に対応した考えを提示することで、多様な価値観に触れ、価値について深く考えられた。
- 全体での話し合いで、子どもから出てきた考えを整理したり切り返したりといった、教師のコーディネートについて、どこに向かえばいいのか見通しを持ち、板書と組み合わせながら構造的にまとめていく必要がある。
- ☆ 手伝いをする価値が「人のため」「自分のため」の二つに大別できるものだったので、黒板をファシリテーション・ツールの一つとして捉え、整理してまとめるように工夫していく。

4 成果と課題

(1) 子どもの学びをつなぐ指導の手立てについて

ア 学習材とつなぐ手立て

- 教材について登場人物の心情などを押さえた上で、人間理解に関係する発問を投げ掛けることで、道徳的価値の漠然とした理解から一歩踏み込んで考えることができていた。
- 事前に教材を読んでおくということが難しかった。発達段階に応じて、何について話し合いたいのかを把握した上で、子どもが考えたいと思えるような問いをつくることを検討したい。

イ 他者とつなぐ手立て

- ファシリテーション・ツールを用いることで、自分の考えを持った上で共通点や相違点などを見付けて比べながら話し合うことができた。
- 子どもから出てきた考えを教師が整理していくことが難しかった。どのような視点で整理していけばいいのか、教材研究の段階で見通しを持っておくことが大切である。

ウ 自分自身とつなぐ手立て

- 毎時間自分の納得のいく考えをワークシートに残していくことで、教師は子どもがどのような考えを大切にしているのかを見取ることができるとともに、子どもは何を学んだのかを自覚することにつながった。
- 低学年の時期の授業の構成として、まず自分の考えを持つことに重点を置いたため、学級で考えをまとめたり、サークル対話を行ったりすることができなかった。発達段階に応じた指導の手立てが必要である。

(2) 子どもと創る「深い学び」における評価について

ア 指導者評価の手立て

- 毎時間のワークシートに加え、学期末にこれまでの学習を振り返り、心に残ったことを書く活動を取り入れることで、「この学習はよく覚えているな」「今もこの考えを大切にしている」といった様子を把握することができ、深い学びへとつながっているかを見取ることができた。
- 長いスパンで道徳科における子どもの成長を見取っていくことはもちろん大切であるが、1時間の授業で深い学びが実現できたのか、多くを求めすぎず、スモールステップで評価を行っていくことが大切である。

イ 自己評価の手立て

- 同じ形式で自分がどのように学んだのかを振り返ることで、無理なく進めることができた。
- 形式的になってしまっているので、学期ごとに自分の学び方を振り返る場を設けるなどして、活用を進めていく。

5 次年度に向けて

- ☆ 子どもが「考えてみたい」と思えるような問いとなるように、道徳的な見方・考え方を働かせるための問いの立て方や問い返しについて整理する。
- ☆ よりよい話し合いへとコーディネートできるように、整理する視点を持って板書に表すなど、視覚的に分かりやすくする方法を探る。

(石崎 正人)